

# 筑波大学名誉教授の会会報

第11号 2006年3月発行

〈題字：中村伸夫〉

## ご挨拶

会長 原 康夫

会員相互の親睦を図るとともに、筑波大学の発展に寄与することを目的とする、筑波大学名誉教授の会には、会の実務をつかさどることを任務とする幹事を旧所属学系ごとに1名または若干名置くことが会則で定められています。2年前に筑波大学が国立学校法人筑波大学に変わり、それと平行して研究科、学群・学類などの組織の改編が進んでいるので、幹事の選出単位としての学系がどうなるのかが気になり、調べてみました。その結果、組織改編後も学系は存続し、しかも、すべての教員が必ず所属する組織は学系だけであるとのことでした。したがって、会則の規定を変更する必要はないようです。

昨年の会報で触れた、名誉教授が学外から附属図書館の電子ジャーナルを利用する件は、他大学の構成員ではない、筑波大学の準構成員としての名誉教授が、研究活動のために電子ジャーナルやデータベースを自宅で利用することが試験的に可能になりました。平成18年度に本格的に可能になる予定です。この措置によって、名誉教授が筑波大学の研究と教育の発展に寄与できる可能性が開けたことを喜ぶたいと思います。なお、詳細については、「お知らせ」をお読みください。本件の担当幹事は岡田益吉会員（drok7@da2.so-net.ne.jp）です。

今年で、会長として4年目になり、後任の方に引き継ぐ年になりました。この機会に会の運営について忌憚のないご意見をお聞かせください。yshara@r05.itscom.net



写真：名誉教授寄贈図書コーナー

名誉教授の会の部屋（大学会館2階）に大切に保存されている。ご寄贈は100名余りの名誉教授の方々からで、調べたところ、蔵書数202点。中でも、小西甚一氏の『日本文藝史全5巻』は総ページ数3,315ページに達する。（文載：島岡 丘）

## 電子ジャーナル等学外利用について（お知らせ）

附属図書館では、「電子ジャーナル等学外利用サービス」の試験提供を開始しました。このサービスによって、下記の電子ジャーナルサイト及びデータベースを筑波大学の外からご利用頂けます。

利用希望の名誉教授の方は、下記URLにある登録申請書にご記入の上、附属図書館（どこでも結構です）のレファレンスデスクにご提出ください。受付時間は平日の9時～17時です（大塚図書館は変則ですので予めお問い合わせください）。

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/online-j/proxy-regist-form.pdf>

※登録申請書の利用者IDとは、名誉教授授与式の際にお渡しした図書館利用証に貼付されているバーコードの番号です。

※当面利用可能な電子ジャーナル・データベース：

ScienceDirect の電子ジャーナル（本学契約分のみ）、SpringerLINK の電子ジャーナル（本学契約分のみ）、Nature の電子ジャーナル（Nature 本誌のみ）、Science の電子ジャーナル（ScienceExpress を除く）、Web of Science（データベース）（契約・利用条件が確認され次第、順次拡大いたします）

なお、本サービスは附属図書館のプロキシサーバを利用しておりますので、ブラウザの設定等が必要となりますので、予めご了解ください。

ご不明な点がありましたら、附属図書館 電子図書館係（内線2469～71/voice@tulips.tsukuba.ac.jp）までお問い合わせください。

# 筑波大学の近況

学長 岩崎洋一

筑波大学が法人化してからはや2年が経とうとしています。最近の1年間に起こったことを中心に筑波大学の近況をご報告したいと思います。

平成17年8月24日につくばエクスプレス（TX）が開通しました。最短でつくば駅と秋葉原駅を45分で結びます。つくばと首都圏との間の人、情報の往来は今までと比較し、格段に増えると思われます。このことにより、つくば市、およびその周辺地域は長期的には大きな変化を受けるだろうと予想できます。また、筑波大学にとっても、通学圏の拡大など大きな影響があるでしょう。筑波研究学園都市が交通網の点からは、ある種、閉じた系であったものが開放系になるわけで、筑波大学の学生気質にも変化をもたらすのではないかと思います。東京とつくばの関係が、米国のニューヨークとプリンストンのような関係になるとよいと願っています。

平成17年6月30日には、法人化初年度にあたる平成16年度の年度実績報告書と決算をまとめ、提出、公表しました。ご存知のように、国立大学法人は平成16年度から6年間の中期目標、中期計画を立て、それに基づき、さらに各年度ごとに、年度計画を立てます。各年度終了後、年度計画の各項目に対して進捗状況を実績報告書としてまとめ、提出することが求められています。年度計画は中項目14、小項目92であり、この作業は膨大なものになります。経営協議会の外部委員からは、労力が掛かりすぎるのではないかと指摘を受けていますが、この枠組みは独立行政法人との絡みもあり変更するのは難しいです。この報告書に対する国立大学評価委員会からの評価結果が9月に公表されました。全般的には、良い評価を受けたのではないかと考えています。本学としては、これらのプロセスを通して明らかになった本学の長所をさらに伸ばすこと、改善すべき点は改善していくことが重要であると考えています。

決算も法人として始めてまとめました。これも初めてということもあり、かなりの手数がかかりました。企業会計の体系を導入し、貸借対照表、損益計算書、などいわゆる財務諸表をまとめ、公表しました。この際、国立大学法人に適していない会計基準が採用されていることもあり、純利益の大部分が会計処理上でできた見かけのものであり、どこまでが目的積立金として認められるかに関しても国の認定作業が大幅に遅れ年を越してしまいました。

教育研究組織の新設・再編・改組もいくつか手がけました。一番重要なものは、学群・学類改組です。第一学群、第二学群、第三学群、のいわゆるナンバー学群の名前とコンセプトが外部の人に分かりにくいこととその改組の必要性に関しては、いわゆる「白表紙」といわれる報告書にも明記されていますし、法人化前の改革委員会の答申にも謳われ、中期計画に明記されています。このことに関して、平成16年の秋に「検討委員会」を設置し、検討を開始し、平成17年7月に最終案が役員会で了承されました。いままで、7学群であったものを9学群に改組するもので、改組の中心はナンバー学群と図書館情報専門学群です。学類は基本的に従来の枠組みを残しました。平成19年度から新しい学群・学類で新入生を受け入れる予定で準備を進めています。新しい学群・学類の具体的な形は、本学のホームページを見ていただければと思います。

大学院に関しては、専門職大学院として、ロースクールを秋葉原のダイビル2フロアを借りて平成17年4月に開設し、ビジネススクール（国際プロフェッショナル専攻）を大塚地区に8月に開設しました。どちらも、夜間開講で有職者を対象とした大学院です。その他に、独立修士課程を博士課程の前期課程に組み込む形の改組が、数理学物質科学研究科、システム情報工学研究科、生命環境科学研究科で行われました。

施設に関しては、総合研究棟A棟に引き続き、B棟、D棟、および産学リエゾン研究センター棟がループ道路沿いに建設され、また生命科学動物資源センターの新棟がPFI方式によって建設されました。

研究に関しては、「はてな」と名づけた新しい生物の発見、ロボットスーツ「HAL」の更なる進化など、数多くの成果を上げることが出来ました。

教育・研究活動をさらに活性化するために、教員人事制度検討委員会、新たな戦略的研究支援システム検討委員会を設置し、議論を重ね、そのうちのいくつかはすでに今年度から実行しています。法人としての経営基盤を確固たるものにするために、財務システムの改善、評価システムの導入に関してもすでに検討を開始し、業務全体を見



単純化されている抽象的な経済モデルで実際のデータをどれだけ説明できるのか、あるいは、できないのか、データの上で経済理論を検証してきました（対象は、品質と価格、生産技術、市場構造、物価指数、マクロ経済現象、等）。現在は、早稲田大学大学院ファイナンス研究科（社会人対象の夜間修士）でミクロ経済学や計量経済学を教えています。経済学の考え方や分析手法を実社会で働いている人々に伝えることができれば幸いです。

退職して半年余り、息子のいる英国を訪ねるなど、あれこれ懸案を片付けました。普段は週に何度か市内某社の隠れオフィスに出かけて、やり残した研究に一応のケリをつけるべくノンビリ勉強しています。ゴルフの腕は復活しつつありますし、自宅では庭の芝生を見違えるほど綺麗にする計画を進めていますので、当面運動不足の惧れはなさそうです。永い間夢見ていた“人に使われない生活”はやはり快適ですが、学会や公共事業のお手伝いから完全に足が抜けるのはもう少し先になりそうです。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

電子・情報工学系に23年間在籍し、音声自動認識や音声合成などの音声情報処理に関連する研究・教育に携わってきました。定年後は産業技術総合研究所の客員研究員および国立情報学研究所の特任教授として、音声関連の研究を続けております。これからはさらに音声データを体系的に集積して、研究に利用できるように整備し、若い研究者のために少しでも役に立てればと考えております。

いわゆる「健康教育」の教育と研究に永く携わってきましたが、未だ大方の理解が得られる学問領域に達していないような錯覚に陥る昨今です。本来から自由であった健康が、あたかも時代と共に新たに自己責任化したような風潮があり、新参入ともいえる健康教育が巷に横行しています。健康教育は健康の押し売りの教育ではないはずで、ということで、本来の健康づくりのための健康教育の実現に向けて、さらに努力したいと思います。

平成17年松本の病院に勤務しました。これから20年間の目標は、北アルプスの東に広がる美しい安曇野の住民を対象とした「安曇野モデル」と呼ぶ夢への挑戦です。これは医療・福祉・保健の組織を運営する財団と幼稚園から大学院までの教育組織と地域の自治体との共同したプロジェクトで、ボランティア活動の実践や「臨床人間学」の少人数グループ討論を通した広く徹底した教育活動で、安曇野の住民個々人の生きがい・幸せの支援です。

## 編集後記

メディアの情報によると、世の中は目まぐるしく変動しつつあるようだ。しかし、学術的な分野では、やはり筑波大学が、つくばエクスプレス線の追い風を受けて、ますます主導的な役割を演じていくことを期待したい。

なお、今回は名誉教授の方々のご寄贈本コーナーを写真で紹介した。新しく会員になられた方々は、是非、名誉教授の会の部屋に來られ200余点のご寄贈本でもご覧いただければ幸いです。

(佐藤泰正・島岡 丘 [会報担当])